第35号
1996（平成8）年5月

くすり博物館だより

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY
内藤記念くすり博物館　〒501-61　岐阜県羽島郡川島町　*Phone*：058689-2101　*Fax*：058689-2197

企画展

百年前のくすり

～いろいろな病にどんな薬でたたかったか～

1996年5月1日～11月24日

一つの文明一つの社会は、それ特有の病気と生態を持つと言われています。日本もその例にもれません。

江戸時代後期の飛騨某寺院過去帳を調査した推計によれば、当時の平均寿命は、女28.6歳、男28.7歳でした。また約100年前の統計では女44.3歳、男42.8歳となっていますが、今日にいたっては女82.5歳、男76.25歳と世界の中で一番の長寿国になりました。

江戸時代後期の平均寿命の低さは、乳幼児死亡率が異常に高かったためであり、乳幼児期や小児期を生きのびた人々では、60歳を越えて生きることも可能でした。しかし現在のように多くの人々が長寿を迎えるためには、医薬品を含めた医療の進歩が大きく寄与してきました。これは一般によく知られているところです。

今回、江戸時代後期から明治時代初期の代表的な薬『紫雪』『鳥犀円』『宝丹』『ウルユス』『六神丸』の薬品・薬袋・効能書などを展示しました。これらの資料より、100年前、人々はどんな薬で病気とたたかってきたか、また、その時代、どのように病気が考えられてきたか、そしてその時代の製剤や効能書の工夫、宣伝の仕方などを見ていただきたいと思います。

「くすり」はその社会の文化を反映した典型的な産物のひとつです。この展示が昔の病について思い浮かべ、また振り返って現在のわたくしたちの健康について思い巡らしていただける機会となれば幸いです。

▼**ウルユス**　「たん、り(ゅ)ういん、しゃく気の薬」と書かれた看板。
（長崎・健寿堂／江戸時代／121×41）

▲**ホルトス**　「たん、しゃく気、り(ゅ)ういんの薬」と書かれた看板。
（長崎・観生堂／江戸時代／114×40）
※脚注部分の数字の単位はcm

ウルユス

「ウルユス」は明和～天明時代（1764～1789年）に発売された薬で、初めて西洋風の製品名がつけられた売薬と言われています。この名前は、“体内の毒を空にす”という意味の「空」を三分割して「ウ」「ル」「ユ」、それに「ス」を加えて「ウルユス」とつけられたようです。

「ウルユス」に関しては薬品のほか、看板・効能書・紙看板・引札などの様々な資料、そして薬屋がお客様に説明する際の手引となる『ウルユス弘方心得書』も残されています。

この薬は単に製品名が目新しいだけではなく、薬の包み紙や効能書などにどのように効くかが具体的に書かれていたり、病状に合わせた使い方が示されているなど、よく読んで使えるように工夫がこらされていました。

また、大阪大学薬学部で分析していただいたところ、薬の成分は緩下作用のある生薬「大黄」が主体で、生薬の品質も良いものでした。

このように、使い方の紹介もうまく、成分も良い製品だったためか、評判も良かったようで、これを真似した『ホルトス』という薬も登場しました。

▶**ウルユス**　右より薬品の上包・中包・内包・製剤。製剤は15粒で、割りやすいように切り込みが入っています。
（長崎・健寿堂／江戸時代／上包；19.5×9、製剤5×3.2）

▲右より、**中屋紫雪**（石川・中屋商店／高さ：6）、**紫雪**（石川・石黒伝六商店／高さ：9）、**亀田紫雪**（石川・黒田永一商店／高さ：5.5）。右2点は年代不明で、左は昭和20年以降のものと思われる。

紫雪

「紫雪（しせつ）」の名は、古くは奈良・東大寺の正倉院に現存する『種々薬帳』にも記載されていますが、薬の実物も薬に関する資料も全く残っていません。今回展示する「紫雪」は、寛文10（1670）年加賀の国の薬種商・福久屋や中屋が、藩主・前田綱紀に願い出て、藩の秘薬「紫雪・耆婆（きば）万病円・烏犀円」の調合を許されたのが始まりとされる熱病の薬です。

ごく微量の金を抽出するため、植物性生薬のエキスの中に麻袋に入れた黄金100両を長時間沈めて抽出するなど独特の製法によって作られる薬です。この薬の主な成分は、清涼感を与える硝石で、朱砂（しゅしゃ）が配合されて美しい紫色の結晶性の粉末となっています。

▲『太平恵民和剤局方』　烏犀円の処方の書かれた部分

烏犀円

「烏犀円（うさいえん）」のもともとの処方は、中国宋代徽宗（きそう）の作らせた『太平恵民和剤局方』に記載されていて、58種類もの生薬を配合したものでした。しかし、その生薬の中には日本では入手しにくいものがあったため、省略したり他の生薬を代わりに用いたりして、各地で作られました。

「紫雪」と同じく“加賀の三大秘薬”に数えられる「烏犀円」の処方もこのうちのひとつでした。この「烏犀円」は、今でいう卒中や動脈硬化に効き目があると言われていました。

その処方は、硫黄と水銀から作られた硫化水銀に動物性生薬を15種類、植物性生薬を40種類、更に鉱物性生薬である朱砂を加えたものです。

宝丹

「宝丹（ほうたん）」は、文久2（1862）年にオランダ人医師ボードウィンの処方によって作られたとされる下痢止めです。江戸時代には自由に薬を製造・販売できましたが、明治3（1870）年『売薬取締規則』が布告されてから、売薬は許可制となりました。そのため「宝丹」は、製造・販売していた守田治兵衛によって翌年早速出願され、許可を受けることができ、官許売薬の第1号となりました。

明治10（1877）年には「宝丹水」「宝丹錠」など剤形を工夫したものも発売されています。また、明治16（1883）年の効能書には、「宝丹」を応急手当として一時的に用い、あとは医師の指示に任せることが明確に記されていました。官許売薬ではあっても、「起死回生」の薬というキャッチフレーズが誇大広告とみなされなかったのはこのためでしょうか。

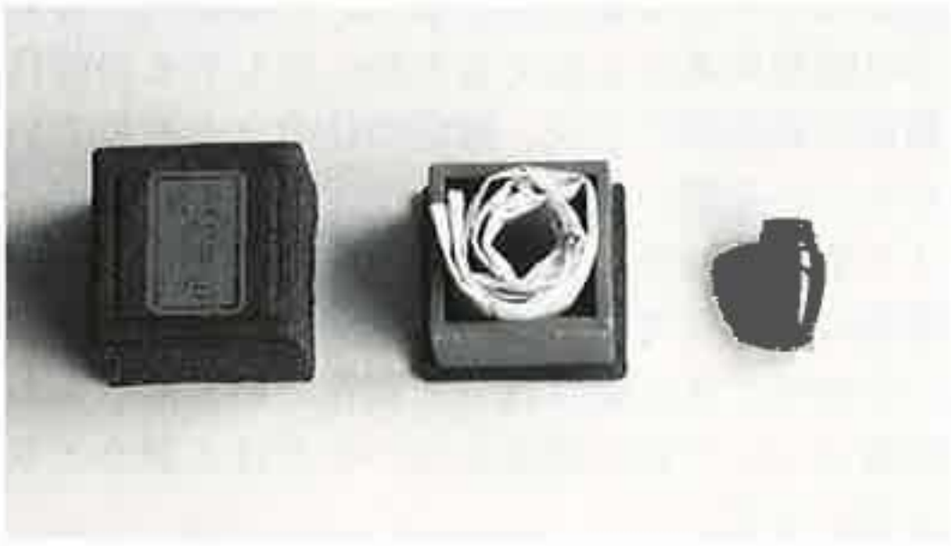
▼**宝丹**　アルミ性容器に赤色の薬品が入っている。昭和元年以降のものと思われる。（東京・守田治兵衛／10×7.3）

六神丸

「六神丸（ろくしんがん）」は中国に古くからあった薬で“六神”とは心・肝・肺・腎・脾（ひ）・膽（たん）の六臓、すなわち6種類の内臓の神とされ、万能薬と言えるほどはばひろい効能がうたわれていました。

この薬を中国から輸入したのが、京都の亀田利三郎でした。彼は中国陶器の中心地である景徳鎮（ケイトクチン）へ行く親戚の陶工に同行したところ、上海（シャンハイ）で病気になり、現地で「六神丸」を服用してたちまち治ったため、この薬を日本へ輸入・販売することを思い立ちました。これが明治26（1983）年頃のことです。しかし配合されていた「雄黄（ゆうおう；硫化ヒ素）」が有毒で、輸入が禁止されたため、処方を若干変えて「亀田六神丸」として国内で生産を始め、心臓病・胃腸病の薬として現在にいたっています。

▼**六神丸**　中国製。箱の中に効能書が入っている（写真中央）。右側が薬品の容器。（中国／3.2×3.2×2.7）



▲紫雪・耆婆万病円・烏犀円
各薬の効能が書かれたちらし。
（石川・亀田伊右ェ門／明治時代／52×34）

◀企画展会場
看板のほか、薬品・薬袋・効能書などが展示されています。

企画展記念出版物のお知らせ

このたびの企画展にちなみ、
『百年前のくすり～いろいろな病にどんな薬でたたかったか～』
を出版いたしました。今回の『くすり博物館だより』でもご紹介しましたウルユス・紫雪など5種類の薬を取りあげ、その薬品・看板・効能書などを写真と簡潔な説明でご紹介しています。

医薬つれづれ抄

薬石と石薬

薬石（やくせき）　「薬石効なく」と言うとき、この「薬石」とは「種々の薬と治療法」を指している。

『正倉院薬物を中心とする古代石薬の研究』（益富壽之助　著）によると、「薬石」の「石」は、鍼術（しんじゅつ）の意味で、インドに発祥し、中国に渡って発達したと言われている。現在、鍼術は金・銀・白金・鉄などの金属製の細針を身体の組織中に刺し、さまざまな手技で針を用いて病気を治療する方法である。また、痛覚をやわらげることから、針を刺して手術の際の痛みを無くしてしまう針麻酔へも発展してきている。

鍼のもともとの形は、石を割って先端を鋭く尖らせたものであり、その尖った先を皮膚に刺して治療した。『国訳本草綱目』によると、「砭石（へんせき）」の項に「鍼石」とあり、古代には石鏃（せきぞく；石で作った矢じり）などを治療に用いたが、後世には石に変わって針が用いられるようになったものであるとしている。またこの効能として、「あらゆる病、臃腫（ようしゅ；悪性のできもの）を治す」としている。

石薬（せきやく）　一方、「石薬」とは、本草学における鉱物性生薬の総称である。東大寺の正倉院に保存されている『種々薬帳（しゅじゅやくちょう）』は日本の薬物の最も古い記録とされ、その中には60種類の薬物が記載されている。その内訳は、動物性生薬10種類・植物性生薬27種類・鉱物性生薬20種類・製剤3種類となっており、鉱物性生薬の利用の頻度をうかがい知ることができる。

今回の企画展で展示されている「紫雪（しせつ）」も、黄金・寒水石（かんすいせき）・石膏（せっこう）・磁石などの石薬を主とした製剤であり、加賀藩の秘薬とされたものであるが、現在の科学ではその薬理作用を理解することはできない。

▲右より、紫雪（石黒伝六商店）の粉末、紫雪（黒田永一商店）の薬袋、目洗薬（井上清七薬房）、炉甘石

このような石薬の中では、炉甘石（ろかんせき）はわかりやすい石薬である。

炉［爐］甘石　炉甘石は化学的には水亜鉛土［$Zn_5(CO_3)_2\cdot(OH)_6$］で、これを加熱して用いる。現在も販売されている「井上目洗薬」は、紅絹（もみ）に包まれた2gの固形の製剤で、精製炉甘石を35%dlカンフルを19%、酸化亜鉛を6%、梅肉を9%、蜂蜜を17%、氷砂糖を14%の割合で含んでいる。これを2mlの水の中でふり動かすと、乳白色に濁り、炉甘石の微粉末と梅肉の果肉中のクエン酸・リンゴ酸とが反応して微細な炭酸ガスの泡を発生させながら、亜鉛などの成分が溶けだしてくる。亜鉛には殺菌作用があるので、この液で目を洗うと眼病によく効いたのであろう。井上目洗薬の創業は宝永2（1705）年とのことなので、当時はまだ酸化亜鉛は配合されておらず、炉甘石が主体の製剤であったと思われる。

炉甘石は、明の李時珍が『本草綱目』に取り上げてから世に知られるようになり（1570年）、日本へは17世紀初めに紹介された。日本で最初の水溶液状の目薬として有名な精錡水（せいきすい）は硫酸亜鉛を用いたもので、慶応3（1867）年に発売された。その発売の150年以上前に、既に亜鉛イオンが亜鉛イオンと認識されずに、炉甘石という形で目薬に利用されていたのである。

炉甘石が亜鉛の作用を利用しているように、石薬にはカルシウム［Ca］・マグネシウム［Mg］・鉄［Fe］・鉛［Pb］・ヒ素［As］・水銀［Hg］や硼酸［H_3BO_3］などのイオンを利用しているものがあるのであろう。

くすり博物館館長　　岩井鑛治郎

西双版納（シーサンパンナ）の植物調査

㈳日本植物園協会による平成７年度の海外植物調査が、昨年10月、中国・雲南省の最南部にある西双版納傣（ダイ）族自治州で実施された。この調査は、西双版納の植物および民族植物学的調査であり、日中合同の調査隊が結成された。日本からはくすり博物館の薬用植物園を含む各地の植物園10園より11名が、また中国からは中国科学院昆明（コンミン）植物研究所・西双版納熱帯植物園より12名の研究者が調査隊に参加した。

調査地は、同自治州の州都・景洪（ヂンホン）の東南にある熱帯植物園の近辺であった。この地方は北回帰線より南に位置し、州の面積の95%が標高550～1,400mの熱帯雨林の山岳・丘陵地帯で、州の西部をメコン河が流れ、ミャンマーとラオスに接していることから中国の中でも東南アジア的気候風土の地域といえよう。傣族のほかにも全部で13の少数民族が居住し、熱帯雨林の山岳・丘陵地帯のうち、ゆるい斜面の森林を伐採しては長い間焼畑農業を営んできた。また平坦部では主に傣族が水稲栽培を行っている。

このような地域で、山野を歩き回ったり、基諾（ジノー）族・哈尼（ハニ）族・傣族などの村落を訪問し、テーマを分担して調査を行った。

傣族の薬草・薬木利用についての聞き取り調査では、使用している生薬が約300種ほどあることが判明した。このうち、100種類ほどは中国名のない植物で、傣族固有の名前しかないため、調査は容易ではなかった。くすりの種類は、胃腸薬・下痢止めの薬・膀胱（ぼうこう）炎や腎臓疾患の薬・ぜんそくの薬・難産のときに用いる薬などいろいろあった。

また日本の植物園にはない植物も多く観察できたことは幸運だった。更に、調査研究用として、種子や苗などを中国から日本へ持ち帰ることができ、調査隊として成果があったといえよう。

持ち帰って栽培したもののひとつに、モダマがある。マメ科の常緑つる性の木で、１mにもなる大きな莢（さや）をつける植物である。発芽に３ヶ月かかったが、一旦芽を出すと生長は早く、温室で１ヶ月くらいの内に１mほど茎を伸ばした。開花して大きな莢をつけるのは２～３年先と思われるが、今から楽しみである。

このモダマは、現地では種子を石けんの代用にしている。また、この種子は直径５～６cmと大きく、携帯用薬入れにもなるとのこと。モダマの名前の由来もこの種子で、沖縄など日本南部の海岸に流れつき、海藻（かいそう）の種子と思われ名付けられた。

このほかに、まるで卵の黄身のような味のおいしい果実のなるクダモノタマゴも発芽したところである。

なお、私たち調査隊がお世話になった西双版納熱帯植物園は、メコン河の支流の中の島状の土地にあり、長い間手つかずの熱帯雨林を切り開いて作った“自然のままの植物園”であった。中国最大の植物園であり、900ヘクタールの広大な敷地に約3,000種の植物を保有している。1959年の開園以来200ヘクタールを一般に開放している。

今回は調査が主体で、広大な園の一部しか見学できなかったが、絶滅を危ぶまれている植物などもたくさんあり、もう一度ゆっくり訪れたいものである。

モダマ　さやの全長：100cm

薬用植物園　白井　英夫

とぴっくす

◆1995年度の企画展　終了

昔のくすり広告を展示した企画展『薬売りの引札～江戸・明治・大正時代のくすり広告』は、おかげさまで盛況のうちに11月23日をもって終了いたしました。現代の広告とはひと味違った風雅な広告をじっとごらんになる来館者の方も多く見受けられました。

◆ベルギーから資料が帰国

10月５日より12月31日までベルギー・アントワープ市のETHNOGRAPHIC MUSEUMで展示されていた資料が２月８日に返却されました。くすり博物館だけでなく、韓国や中国からも資料が集められ、展覧会は大変盛況だったということです。

◆体験コーナーが変わりました

新しく体脂肪計がお目見えしました。体重等を入力して機械を握ると、身体にどれだけ脂肪がついているかわかります。全自動身長体重計・血圧計は機械が古くなったため、新しくしました。

◆70万人目の来館者をお迎えしました

1995年11月26日に来館された愛知県刈谷市の野村達生(35)様が70万人目となりました。奥様の由美様と一宮市のご実家から一宮タワーへ遊びに来た後、ご来館されたとのこと。予想していなかっただけに、岩井館長より記念品を贈られて「大変びっくりしました」。1994年４月に60万人目をお迎えしてから、わずか１年８ヶ月で70万人目となりました。

野村様ご夫妻と岩井館長

◆植物画作品展も３回目

52名の受講者のうち、30名の方が出展され、１月30日より３月23日まで開催。作品展も３回目ということで、個性の光る作品が揃いました。

講師の逸見からは、ビワを題材に、原画を生かした清書の方法が紹介されました。

◆千葉実母散の生薬切断機をご寄贈いただきました

アサヒビール薬品㈱の茨城工場に保管されていたもので、千葉実母散の原料の生薬を刻むのに用いられた大きな臼と刃のついた杵を２組ご寄贈いただきました。もとは鉄製の機械で、動力によって５組の臼と杵が生薬を刻みましたが、大変重量があるため、２組だけ当時の雰囲気のままロビーに展示することといたしました。ぜひごらんください。

資料・図書のご寄託者・ご寄贈者ご芳名

アサヒビール薬品㈱　荒尾素次
市川次郎　㈱井上清七薬房　井上高子
ETHNOGRAPHIC MUSEUM　大久保浩
奥田潤　片桐平智　国木田誠一
国際薬史学会　小松良夫　島田愛子
杉本つとむ　鈴木昶　滝戸道夫
武知京三　㈱中日エムエス
ドイツ日本研究所　道修町文書保存会
朝長文弥　中島路可　中村新三
松木明知　吉田良利　（敬称略）

ありがとうございました

館長　岩井鎮治郎　学芸員　稲垣裕美（編集担当）、朝倉加代　学芸員・司書　野尻佳与子、伊藤恭子　庶務　森田麻起子
説明員　小島敦子　業務補佐　星野信子　薬用植物園　白井英夫、栗本省三、松尾三雄　顧問　青木允夫
アドバイザー　逸見誠三郎　内藤記念くすり博物館　開館／９：00～16：00　休館／月曜日・年末年始［12/28～1/8］